

頁	章・節	項目	誤	正	掲載日	
21	1. 1. 5	A. 図1. 1. 8	屋根勾配 (図の差し替え)	<p>図 1. 1. 8</p>	2015. 12. 9	
180	3. 1. 4	E.	A ₅ =~ の式 3行目	3, 200 <u>kN</u>	3, 200 <u>mm²</u>	2015. 12. 9
326	4. 9. 6	B. (2)	下から 8 行目	細粒分含有率10%であるから、	細粒分含有率5%であるから、	2015. 12. 9
334	4. 9. 9	図4. 9. 5	(b) H ₁ ~P _L 判定図	建築H ₁ -P _L 法による P _L 値 道示H ₁ -P _L 法による P _L 値	道示H ₁ -P _L 法による P _L 値 建築H ₁ -P _L 法による P _L 値	2015. 12. 9
62	1. 5. 4	A. (2)	上から4行目から、 Bの上まで	<p>今回の検討では適用範囲外ではあるが、式の違いにより値がどの程度変化するかを確認するために、仮に略算式を用いた場合についても算出してみると、式(1.5.2)より</p> $C_k = \frac{1}{1 + \frac{4.7 \times 2.5 \times 2730^2}{8.0 \times 270^3}} = 0.643$ <p>が求められる。この値を用いた場合の壁倍率は、</p> $4.459 \times 0.643 / (1.96 \times 0.91) = 1.60 \text{ 倍}$ <p>となり、精算の場合と比べるとやや大きな値を取る。</p>		2019. 6. 5
197	3. 3. 4	G. G. (1)	上から5行目 一番下の行	29.6×1.5=44.4 kN Qa=44.4 < OK	30.2×1.5=45.3 kN Qa=45.3 < OK	2020. 5. 12
198	3. 3. 4	G. (2)	下から3~2行目	=-26.4-75.7=-102.1 kN R2 =102.1 < q _{S19} =104 kN	=-26.4-(-75.7)=49.3 kN R2 =49.3 < q _{S19} =104 kN	2020. 5. 12
307 ~ 311	4. 7. 3	図4. 7. 1	土圧モデル 図中⑤	別紙1参照(⑤の修正に伴う訂正)		2022. 5. 20
217	3. 5. 4	D.	・フランジ側	別紙2参照(計算式の訂正及び参考文献3)追加)		2022. 7. 2